

て、回鶻の助けによつて漸くその勢を盛り返すことが出来てからは、禍根長く盡きず、金銀繪帛を贈り公主を降嫁せしめて其の歡心を買はうとした如きは寧ろ屈辱の輕きもので、終には天子馬を下つて回鶻の可汗を拜するといふ様なこともあつたのである、かゝる次第であつたからして可汗が新たに位に即けば唐の天子は美辭を連ねてその稱號を贈り、死すれば其の功業を文にして石に勒して永遠に傳へるのが常例になつた、もとよりこのことは突厥の時にも既に行はれたので、有名なる闕特勤の碑の如きは即ちそれである、此等の碑文は大抵二様の文字で書かれるのが常で、一方には漢文を以て書き一方にはユニセイ文字回鶻文字などで記して居るが其文句は必らずしも同一ではない、此等突厥にせよ回鶻にせよともにトルコ人種であるからして、その文字の如何に係はらず言葉はトルコ語を用いて書いたものであらうとは誰しも想像すべきことで、從來多くの學者が此等の碑文を解釋するにつけても、皆此考の下に研究をすゝめて行つたものである、假令ば蒙古の考古圖 (Atlas der Alterthümer der Mongolei) を出版し且つ此等の碑文の説明に努力して居る名高き露西亞の東洋學者 Radloff 氏の如きもその一人である、然るに此原則は今日では少しく動搖せねばならぬことになつて來た、即ち回鶻文字などで書いてある碑文は必らずしもトルコ語許りではないと云ふ考を持たねばならぬ様になつたことである、勿論トルコ種族の間に起つたことを書いたのだからして假令他國語を以て書いてもその間にトルコ語が少からず用ゐられ得べき」とは當然のことで、之が爲に從來の學者はトルコ語で書いたものとの考を少しも疑はなかつたのであらう、けれども近頃頻りに進むで來た古代東方語の研究の結果によると、終にそれは、誤りであることが證據立てられて居る、柏林の學者 F. W. K. Müller 氏は、すなはち此の新研究を公にした人で、一九〇九年の *Sitzungsbericht der königlich preussischen Akademie*